

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

児童養護施設における子どもの心理支援に関する研究
—学習と進路の問題を通して—

氏 名

柴田 一匡

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、児童養護施設における学習および進路の問題を通して、子どもの心理支援について検討することである。特に、児童養護施設の心理職の立場から、学習と進路支援について、新たな視座を得ることを目的としている。そのため、本論文では、学習と進路支援を、学力向上や進路先を決める支援だけではなく、学習と進路の問題を取り扱うことで、入所する子どもの生き方や自己実現を支援する、という観点から位置付けている。

児童養護施設に入所する子どもは、被虐待体験等により、過覚醒、回避・麻痺などのトラウマ反応や、愛着対象の永続性、安全感の喪失など、さまざまな心理的・行動上の問題を抱えている（奥山，1997 など）。虐待は学業成績や意欲にも影響を及ぼすとされており（Rowe & Eckenrode, 1999），さまざまな症状を抱える子どもにとって、学習に集中して取り組むことや、進路を主体的に考えることに、大きな困難が伴うと考えられる。しかし、児童養護施設における学習と進路の問題は、生活指導等の陰に隠れやすく、まだまだ各施設、各職員が苦慮しながら取り組んでいる状態にあり、その実態が見えにくい。また、施設の生活担当職員や心理職が主体となり学習と進路支援をした研究は殆ど見られず、知見の蓄積が必要とされている。

以上のことから、本論文では、第1章にて、児童養護施設における学習および進路の問題とその支援に関する先行研究を概観し、本論文の問題意識を述べる。次に、第2章では、児童養護施設における学習および進路の問題とその支援に関する実態を、質問紙調査から明らかにする。そして、第3章では、児童養護施設の心理職としての実践から、学習と進路に関する支援プログラムの開発と効果について検討し、さらに、第4章にて、学習と進路の問題への心理支援事例を取り上げ、学習と進路支援における心理職の視点の活用について検討する。第5章では、第1章から第4章までの内容を総括し、児童養護施設における学習と進路の問題を通じた心理支援の意義と、本論文の限界及び今後の課題について論じる。

【第1章 児童養護施設における学習と進路に関する研究・実践の展望】

第1章では、はじめに、児童養護施設の歴史的変遷について、制度・政策動向を軸に3期に分けて整理した。次に、児童養護施設に入所する子どもの心理学的特徴と、子どもの心理支援に関する研究を概観し、課題を論じた。その上で、児童養護施設における学習と進路の問題に着目し、①学習の問題とその支援に関する研究、②進路の問題とその支援に関する研究、の2つのテーマに分類し、これまでの研究を概観した。学習に関する先行研究からは、児童養護施設に入所する子ども達の様々な特徴が学習に及ぼす影響が指摘されており、個別の支援が課題として挙げられた。また、学習支援者は、勉強を教えるに留まらない、虐待等により心身に傷を抱えた子ども達の愛着対象や相談相手として機能する可能性が示された。今後は、心理職はじめ、児童養護施設の職員が学習支援にどう関わられるか模索していくことが、研究課題として整理された。進路に関する先行研究は、主に調査研究であり、施設における具体的な進路支援に関する研究は見られなかった。そのため、子どもへの進路支援に関する実践研究の蓄積が課題とされた。特に、入所する子どもの進路支援においては、情報提供に留まらない、子どもの心理面に配慮した進路支援が重要であることが浮き彫りになった。

【第2章 児童養護施設における学習および進路の問題とその支援に関する実態調査（研究1）】

第2章では、実態調査から児童養護施設が抱える学習および進路の問題とその支援の特徴を明らかにし、施設における学習と進路支援に必要な視点を検討した。全国の児童養護施設の内、調査協力の得られた92施設を対象に、入所する子どもの学校在籍状況、過去3年間の進路状況及び中退・離職状況、施設の学習・進路支援体制（20項目）、学習・進路支援における職員の意識と状況（20項目）、自由記述、について尋ねた。その結果、児童養護施設に入所する小学生・中学生の2割以上が、通級学級、特別支援学級、特別支援学校に在籍しており、特別な支援を必要とする子どもの入所率の高さが示された。また、公立高校への進学は認めるが、定時制高校や専修・専門学校への進学は認めないなど、子ども達の進路選択に施設の体制が多大な影響を及ぼすことが示唆された。さらには、高校・大学等の進学先からの中退、就職先からの離職となる者も多数見られ、中退・離職による心理危機的状況への対応の必要性が明らかとなった。入所する子ども達を支える環境としては、小舎制（小規模グループケア含む）の方が一定の良さがあることが考えられた。そして、施設職員は、知的な問題だけでなく、子どもの行動や情緒の問題に苦慮しながら、学習と進路支援している状況が明らかとなった。児童養護施設における学習と進路支援に必要な視点としては、子どもの特性と置かれた状況の理解、それを踏まえた個の対応として、臨床心理学の知と技法を積極的に活用した子どもの心理面への配慮が挙げられた。また、実態に即した制度化や学習・進路支援体制の構築を進めていくことが急務であることが示された。

【第3章 児童養護施設における学習と進路支援プログラムの開発と効果（研究2）】

第3章では、児童養護施設における学習と進路支援プログラムの開発と効果について明らかにした。学習と進路支援プログラムは、経済的・精神的な後ろ盾が少ない、児童養護施設に入所する子ども達（小学6年から中学3年）を対象に開発され、保護者支援や関係機関との連携までを見据えた組織としての包括的なプログラムとして示された。また、プログラム全体を通して、子どもの心理面に配慮すること、学習と進路の問題を通して子どもの生き方や自己実現を支援する関わりに重点が置かれた。プログラムの効果測定は、プログラムの対象となった中学生に、プログラム実施前後に質問紙調査を行い、量的な比較・検討を行った。また、プログラム実施時に用いたプログラム評価表から質的な検討を行った。その結果、質問紙調査による量的検討では、子どもの意識に有意な変化は認められなかった。一方で、プログラム評価表による検討からは、子ども達が自己に気づききっかけとなり、他者との関係性に影響を及ぼしていることが推察された。施設職員にとっては、子どもの学習と進路支援の必要性を感じ取る機会となり、子ども達への声かけや介入方法の意識に変化が起きたことが考えられた。加えて、プログラムを開発・実践する中で、多角的な視点から学習と進路支援プログラムに連携して取り組む体制が構築できたことが明らかとなった。さらには、心理職による臨床心理学の視点は、入所している子ども達の心理面に配慮したプログラム開発と実践に貢献し、施設職員に子ども達の心理面への配慮の重要性を伝える機能を果たした。

【第4章 児童養護施設における学習と進路の問題への心理支援—施設心理職ならではの視点を活かした事例を通して—（研究3）】

第4章では、児童養護施設において心理職ならではの視点を活かして学習と進路支援を行った事例を通して、施設心理職による学習と進路支援の意義を明らかにした。施設から退所（可能性を含む）となる状況に置かれていた3名の子どもへの支援事例を取り上げた。これらの事例から、学習と進路支援における心理職による心理アセスメントを有効に活かすことが、学習と進路支援の要となることが明らかとなった。また、子どもの言語化できない気持ちに意識を向けるなど、心理面接における心理職の視点は、学習と進路支援においても活かすことが示された。さらには、心理職が学習と進路支援に携わる上で、生活担当職員への心理コンサルテーションや、臨床心理学的視点を施設コミュニティや支援ネットワークに意識して働きかけることにより、学習と進路支援を通じた包括的な支援を担えることが示唆された。これらのことから、心理職が学習と進路支援に携わる意義は、①児童の生き方や自己実現を心理的側面から支える（児童への心理支援）、②学習と進路支援を行う職員を心理コンサルテーションから支える（職員への心理支援）、③施設の心理職の新たな役割や可能性を提示する（施設心理職の進展）の3点に集約された。

【第5章 総合考察】

第5章では、これまでの各章で得られた知見をまとめた。そして、本論文が児童養護施設における子どもの心理支援において果たす意義について、①児童養護施設における学習と進路の問題の明確化、②学習と進路を通じた子ども達への心理支援モデルの提言、③施設職員による学習と進路支援の進展、④心理危機マネジメントとしての学習と進路支援体制の構築、⑤施設心理職の新たな役割や可能性の提示、の5点に整理した。最後に、本論文の限界について言及した上で、今後の児童養護施設における心理職による学習と進路支援の実践と研究について展望した。